

# 柏木教会月報

11月号

東京都新宿区北新宿3-1-18 ☎03-3368-2156 [www.church.ne.jp/kashiwagi/](http://www.church.ne.jp/kashiwagi/)

## 神の国への招き

ルカによる福音書一四章一五〇—二四節

「主人は言つた。『通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ』」(二三節)

牧師 村松 恵美

このたとえには、宴会の招きを断つた人たちのことが書かれています。その人たちとは、それぞれ断るのに、もつともな理由があるようみえます。しかし、そこにあるのは、自分のこと優先するという思い、招かれて当然だという思い、そして、自分たちは、いつだってその主人から招かれているのだから、行けるときに、また行きたいという傲慢な思いでした。

このたとえは、主イエスがファリサイ派のある議員の家に招かれ、そのうちの一人が、「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と言つたことから語られました。この言葉の中には、自分たちは神の言葉を正しく守っているから、いつでも神の国食事に招かれているという思いがあることを、主は知つておられたのです。この人は、自分の方に、招きの主導権があると思ひ違ひをしていたのです。

たとえの中で、次々に断られたことを聞いた主人は、「急いで町の広場や路地に出て行って、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに

連れて来なさい」と言います。これらの人たちは宴会に招かれても、宴会の後で、お返しをすることも出来ない人たちであり、ユダヤ人からは、低く見られ、神の国にはふさわしくないとされている人たちでした。こうして、最初は宴会に招かれていかつた人たちが連れて来られました。それでも、まだ席があります。すると、主人は、次に、通りや小道に出て行って、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてみたいという主人の思いによって、宴会に招かれていなかつた人々が招きにあずかることができたのです。

「盛大な宴会」とは神の国であり、「主人」は神さまです。このたとえはファリサイ派の人々に対して言われたものでした。しかし、これは、神の招きを受けながら、それを忘れてしまつてゐるわたしたちに対しても語られているのです。招かれているという大きな恵みを、いつの間にか当たり前のこととしてしまつていなか、自分の都合の方を優先させてしまつていなかと問われています。わたしたちは、知らないうちに、自分たちは神から招かれている者だという高ぶつた思いになり、人を裁いてしまうのです。わたしたちが招きにあずかるのは、神から与えられている恵みによるのです。自分の側には何の理由もありません。神はこの一方的な恵みによつて、ひとり子を与えてくださいました。神の国に迎え入れてくださるために御子を遣わし、十字架にかけてくださつたのです。神の国に招かれるはずのない罪人を、無理にでも捲して招いてくださいました。神の国に迎え入れてくれる感謝を持って歩んでいきたいと思います。